

## 編 集 後 記

昭和 39 年、農林水産省家畜衛生試験場に「SPF 豚生産研究会」が柴田重孝博士を長として出発して以来今年で 17 年になる。当研究会ではまず実験動物としての SPF 豚の作出とともに、その畜産目的の技術開発についての検討がなされた。昭和 41 年にわが国最初のプライマリー SPF 豚生産施設が家畜衛試に設置され、その生産が開始された。基本的な技術については米国ネブラスカ大学の故ヤング博士およびアンダダール教授に負うところが大きい。

その後実験動物としての SPF 豚の需要が拡大するとともに、畜産目的のそれについても関心が高まった。当初畜産目的についての成績はわが国に無く、したがって行政面ではこのことを理由にモデル的な SPF 豚生産に対する検討については消極的であった。しかし、これとは別に、千葉県が独自で、また全農飼料畜産中央研究所にそれぞれプライマリー SPF 豚生産施設をもうけ畜産目的の SPF 豚生産実験が開始されるに至った。さらに家畜衛試との協同研究の型で民間企業数社が SPF 豚生産を行うこととなり、それらからの成績も除々に蓄積されてきた。その間多くの研究会や検討会が開かれたが、これらは一括して昭和 44 年に発足した日本 SPF 豚協会で推進されることになった。

いうまでもなく SPF 豚とは SPF 状態の豚であって品種ではない。したがって畜産目的の SPF 豚を生産するに当って、これに必要な技術の改良および成績が必要とされる。そこで当協会から、これらの目的のため、研究発表および資料を主体とした「SPF Swine」が発行されることとなった。昭和 45 年 6 月 1 日にその 1 巻 1 号が発刊され今日に及んでいる。本誌における報告および資料の総目次は本号の末尾に添付されているが、これらは当初担当行政面から求められた要求にこたえ得るものとする。

一方、昭和 48 年 12 月 10 日に農林水産省技術会議姫野研究管理官招集の「畜産目的に対する SPF 豚」に関する会議が行われた。この席で姫野管理官から「SPF 豚の生産技術をひとつのテクノロジー・アセスメントの面から協議したい」との理解ある発言がなされ、農林水産省としてはもはや SPF 豚は畜産目的に関して否定的ではない方向が打出された。しかし行政として国が取りあげるにはさらに掘り下げた研究が必要であろうとする一方、積極的に新しいものは取り入れて行くべきであろうとの意見もでてきた。

その後 8 年を経た現在種々の場所、公共団体、民間で SPF 豚生産が慎重に進められ全国で年間約 50 万頭以上の出荷をみている。これらの成績を通覧すると、当初の目標がほぼ実現されたといえる。すでに検討段階やモデル的な範囲を越え、日常的養豚の生産性

向上のための1技術として定着した感が強い。

このような背景をふまえ、開発の進展を目的とした「SPF Swine」の発行を本号をもって終了し、新たな企画で SPF 豚に関する「年間報告 Annual Report」を発行することが昭和55年度の日本 SPF 協会総会で決議された。

いままでに本誌が果してきた役割は決して小さいものではなかったと信ずるが、これひとえに SPF 豚生産に関わってきた多くの方々による賜ものである。

今後、畜産目的についての研究発表は、関係する諸学会、研究会で行われることとなる。ここに本誌の使命をまっとうするものである。

最後に本誌編集委員会は、本誌発行に当って終始多大の協力を惜まれなかった近代出版納谷正夫氏とその担当者の方々に深謝する。

〔波岡 記〕

---

SPF Swine                      Vol. 9    No. 1 (終刊号)

昭和56年6月1日発行    定価 450円

編 集	日本SPF豚協会編集部 〒160-91 東京都新宿区西新宿2-6 新宿住友ビル(住商飼料畜産隣内)
編集責任者	波岡茂郎 北海道大学獣医学部内科学教室 〒060 札幌市北区北十八条西九丁目
発 行	株式会社 近代出版 東京都渋谷区渋谷1-10-1八千代ビル 〒150 電話 03(499)5191
印 刷	河和田屋印刷株式会社

---